



TITLE:

大量観察法に関する一著作 -  
FZizekの新著に就て -

AUTHOR(S):

有田, 正三

---

CITATION:

有田, 正三. 大量観察法に関する一著作 - FZizekの新著に就て -. 経済論  
叢 1938, 46(3): 491-497

ISSUE DATE:

1938-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131066>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 三 號 第 四 十 六 卷

昭和十三年三月一日發行

## 論 叢

謂はゆる預金通貨の公式について……………經濟學博士 小島昌太郎

共同體思想の國民的性格……………經濟學博士 石川興二

社會的文化的變動の形式……………文學博士 米田庄太郎

歐米に於ける日本學研究に就いて……………經濟學博士 本庄榮治郎

## 時 論

農地調整法案に就いて……………經濟學博士 八木芳之助

## 研 究

經濟擴張の理論……………經濟學士 飯田藤次

貸借對照表分析論に關する若干の問題……………經濟學士 岡部利良

## 說 苑

戰時に於ける女子勞働……………經濟學士 大塚一朗

勞働市場分析の一例……………經濟學士 菊田太郎

大量觀察法に關する一著作……………經濟學士 有田正三

## 附 錄

雜 報・外國雜誌論題

(禁 轉 載)

# 大量觀察法に關する一著作

—— F. Zizek の新著に就て ——

有田 正三

茲に F. Zizek の新著 „Wie statistische Zahlen entstehen“ (1937. Leipzig) を紹介した。

著者の統計學一般、特にこゝで問題になる大量觀察法に關する見解は、その主著『統計學綱要』<sup>1)</sup>及び『統計方法論の五つの主要問題』<sup>2)</sup>で窺ふことが出来る。著者は、大量觀察の對象として、大量を念頭に置き乍ら、大量の大量たる所以、即ちその存在及び大きさの客觀的・社會的被規定性を明確に意識せずして、單に „Gesamtheit der gleichartige Einheiten“ と規定するにすぎないため、大量觀察と大數觀察との混同が起つてゐる。更に氏は大量觀察の方法を明確な認識論的基礎に立つて規定せず、その結果、規定に理論的必然性を缺いてゐるのは、甚だしく遺憾である。

大量觀察法に關する一著作

さきの二著で知り得る如く、著者の見解の中核は、  
„Theorie von den vier entscheidenden Begriffen“<sup>3)</sup>にあり、諸學者の批判が是の點に集中されたのも亦當然であらう。<sup>4)</sup>氏に依れば、統計調査者は四つの基本概念、即ち調査單位・調査標識・群・表章を媒介として對象を認識する。大量觀察の結果たる統計的數 (st. Zahlen) とその意味はこの四概念の規定如何にかゝり、この規定が變化すれば統計的數及びその意味も又變化せざるを得ない。それ故にこの四概念は統計的數及びその意味の „Bestimmungsgründe“ である。統計調査者が求める統計的數を獲得しうるや否やは、この四概念を如何に規定するかに依存するのみならず、統計利用者は所與の統計的數を利用するにあたり、その基礎たる四概念の規定を省み、其統計的數の意味を理解し利用目的に役立ち得るや否やを検討する必要がある。著者は四概念の規定を、統計の作成及び利用上の目的を前提し、之との聯關の下に捉へてその重要性を強調してゐるのであるが、この點を十分に明確にせず、更に四

1) „Grundriss der Statistik“ 1 Aufl. 1921, 2 Aufl. 1923.

2) „Fünf Hauptprobleme der statistischen Methodenlehre“

3) „Fünf Hauptprobleme“ § 1.

4) Zizek は „Theorie von den vier entscheidenden Begriffen“ のみならず、前掲二著に對する諸批判に „Meinen Kritikern“ (Allgemeines Statistisches Archiv, 14 Bd., 1923/24, S. 188-232.) で答へてゐる。

概念と、之を規定する操作及び大量觀察の過程における他の諸操作との聯關が必ずしも明確にされたとは云へなかつた。新著 „Wie statistische Zahlen entstehen“ では、是の點に留意して、「統計的數」の成立過程に前提される目的を明確に規定し、之との聯關の下に統計的數の成立過程における諸操作をとらへ、夫々の操作の有する機能と相互の聯關を明かにすることに依つて、前の二著の缺點と不明確な點を補ひつゝ、大量觀察の方法を明かにしようとしてゐる。

## 二

本書に於て著者の意圖する所は、本書冒頭のテーマに述べてゐる如く、「統計的數」の成立過程を明かにすることに依つて、統計方法論<sup>1)</sup> 特に一般統計方法論に於ける問題を解決することにある。著者は一般統計方法論に於ける問題を、統計方法が適用される對象の問題、統計方法の目的に關する問題、統計方法自體の問題に分けてゐる。<sup>2)</sup>

著者の云ふ所に依れば、方法は何らかの目的を前提

し、この前提された目的を達成するために定められた手續である。目的は方法に方向を與へ、目的が相異れば方法も相異らざるを得ない。方法の正當性は、それが目的の達成を可能にし確實にするや否やを検討して始めて判斷することが出来る。<sup>3)</sup> 著者はかゝる見地から、方法と目的を區別し、本書のテーマの一つとして、「統計的數」の成立過程の始めに定立される目的を明かにし、それとの聯關の下に方法を研究しようとしてゐる。

次にこの目的を前提し、「統計的數」の成立過程の形式的・一般的分析により、目的を實現するために必要にして不可欠的な操作、著者の用語に従へば „Die entscheidenden methodischen Vorgänge“ (以下基本的操作と呼ぶ) を摘出すること、その内容と相互の聯關を規定して、一般的統計的數獲得の方法を明かにすること、これが第二の要點である。

次に基本的操作が有する機能を明かにして、如何なる操作が一般的統計的數の獲得の方法を具體的な目

1) (一般並びに特殊) 統計方法論に關する著者の見解は本書の前に發表された „Die ‚Allgemeine‘ und die ‚Spezielle‘ statistische Methodenlehre“ („Jahrbücher, für Nationalökonomie und Statistik“ III Fol. 83 Bd. 1933, S. 642-692) に於て詳細に述べられてゐる。 2) „Wie st. Zahlen entstehen“, S. 2-5.  
3) a. a. O., S. 4.  
4) a. a. O., S. 13-14.

的と具體的な對象へ順應せしめる機能を有するかを規定しようとしてゐる。この順應の機能を有する操作を明確にすることに依り、個々の統計的數の獲得の際、如何なる操作に重點が置かれねばならぬかが明かになる。

著者は統計方法の適用される對象を「統計的集團」と呼び、Gesamtheit der gleichartige Einheiten と規定するが、その云ふ所が、大量であるか「意識的に構成された集團」であるか本書に於ても必ずしも明確ではない。但し本書に於ては對象に關する問題は研究の範圍から省略され、従つてさきにあげた問題は以下に於ては、二つのグループ（目的と方法）に限定される譯である。

統計的研究は相異つた目的とそれに應じて相異つた方法を有する二つの段階に分れる。兩者とも集團即ち「統計的集團」を研究するが、一方の段階は特定の集團を數量的に語る説明、「統計的數」の獲得を目的とするに反し、他方は所與の統計的數から特定の推論を誘導することを目的とする。著者は前者を「統計的數獲

得」の段階と云ひ、後者を st. Auslegung と云ふ。各段階の手續を「統計的數獲得」又は st. Auslegung の方法と云ひ、その複合を st. Methode と呼ぶ。本書に於ては、「統計的數獲得」の段階に考察の範圍が限られてゐることは云ふまでもない。

「統計的數獲得」に於ては三種の目的が定立される。<sup>5)</sup> 一つは、特定の集團及びそれに就て問題になる部分集團を特徴付ける數量的説明の獲得である。之の目的定立は「統計的數の獲得の際に常に妥當する、基本的な目的、定立」として、次の二つの「絶對的には妥當せざる、附隨的な目的、定立」と區別されてゐる。(1) 特定現象の惹起に關し同質なる集團の統計的數の獲得。(2) 當該現象に作用する一般的本質的原因の結果を表現する統計的數の獲得。本書に於ては「基本的目的」のみを前提した「統計的數獲得」の方法が研究される。蓋し附隨的目的に對する方法は基本的目的を前提した方法を基礎にして考へ得られるから。<sup>10)</sup>

### 三

5) a. a. O., S. 3.

6) a. a. O., S. 5. 兩段階の限界に關し、著者は st. Verhältniszahlen と st. Mittelwerte の算出が兩段階の中間的段階であることを指摘した上、それを st. Zahlengewinnung の段階に入れてゐる。(a. a. O. S. 8.)

7) より嚴密に云へば「狹義」の st. Methode.

8) a. a. O., S. 5-6. 11.

9) homogene (Masse). 10) a. a. O., S. 6. 11.

著者は「統計的數獲得」の方法的規定を以上に述べた立場と前提で、形式的・一般的に規定し、同時にこの形式的・一般的規定が個々の適用事例及び適用領域へ如何に順應し得るかを規定してゐる。<sup>1)</sup>

内容的に見ると、先づ基本的目的を前提し、是を實現するために必要にして不可缺な操作は何か、著者の用語に従へば「統計的數獲得」に於ける基本的操作 „Die entscheidenden methodischen Vorgänge“<sup>2)</sup> を抽出すること、次に是等の操作の相互の連關と機能を明かにすることに重點が置かれてゐる。

著者の云ふ所を約言すれば、統計的數を實際に獲得するに必要な方針を定める操作が「統計的數獲得」の Entschliessungen で、この規定の下に統計的數を實際に獲得する外的な sichtbar な操作が Arbeitsvorgänge である。<sup>3)</sup> この二範疇の操作を „Die entscheidenden methodischen Vorgänge“ と呼ぶ。 Entschliessungen を内容的に見ると、(1)調査單位・調査標識・群・表章の四基本概念を規定する logische Entschliessungen

と、(2) Arbeitsvorgänge を實際に施行する手續、即ち蒐集の手續と整理の手續を定める organisatorisch-technische Entschliessungen との二つの範疇に著者は分けてゐる。<sup>4)</sup>

調査單位・調査標識を定める二つの logische Entschliessungen と、蒐集手續を定める Entschliessung は、この二範疇の操作に依つて與へられた規定の下に、實際に調査單位を數へ上げ、(或は測り)、調査單位に就て調査標識を觀察する二つの Arbeitsvorgänge と共に「蒐集」の段階を構成し、「統計的數獲得」の前段的行程をなす。「蒐集」に對して「統計的數獲得」の後段的行程をなす「整理」の段階は群・表章を定める二つの logische Entschliessungen と「整理手續」を定める Entschliessung 及びこの二範疇の Entschliessungen の規定の下に、蒐集材料に依つて調査單位を整理分類して集團及び部分集團にまとめ、表章を算出する二つの Arbeitsvorgänge から成る。「蒐集」は個體の觀察に依つて(是の段階を著者は本質的には個體觀察と考へる) Individualdaten を蒐集し、<sup>5)</sup> 「整理」は Individualdaten を集團及び部分集團の特徴付に變形する行程 Umformungsprozess である。

この「蒐集」と「整理」の過程において、Entschliessungen

1) a. a. O., S. 13-85.

2) a. a. O., S. 14.

3) a. a. O., S. 14.

4) 規定事項は Erhebungsplan として定式化される。(a. a. O., S. 93).

5) 規定事項は Bearbeitungsplan として定式化される。(a. a. O., S. 39)

6) a. a. O., S. 36-48. 「蒐集」を著者は primärst. Erhebung と sekundärst.

は Arbeitsvorgänge に基準を提供する。四つの logische Entschliessungen は、四つの Arbeitsvorgänge に對應してその範圍と内容を規定し、technische Entschliessungen はその形式を規定する。Entschliessungen に依つて定められた形式・内容及び範圍は、Arbeitsvorgänge は實際に統計的數を獲得する。

以上の如く在來「大量觀察 Massenbeobachtung」と稱せられたものを、基本的な操作にまで分解した點は、誠に著者の云ふ如く新しいものであるに相違ない。

著者はこの基本操作の内容と相互の聯關の規定を「統計的數獲得」の一般的方法としてゐる。蓋し基本的操作の一體は個々の「統計的數獲得」の具體的目的と對象から生ずる特殊性から抽象され、「統計的數獲得」の模型であり、その内容と相互聯關の規定は、模型的な「統計的數獲得」の手續であること、而して個々の「統計的數獲得」にあつては、具體的な目的と對象に制約されてゆがめられるとは云へ、之を基礎にして手續を立てることが出来るからである。併し乍らこの一般的方法は個々の「統計的數獲得」の手續の基準となり

得ても、直ちにその手續とはなり得ない。一般的方法は如何にして個々の「統計的數獲得」における具體的な目的と方法に順應し得るかの規定が附加されねばならぬ。著者は logische Entschliessungen に、一般的方法の特殊化の可能性、換言すれば、個々の統計的數獲得の具體的目的と對象への順應の特殊な機能を認めてゐる。

#### 四

著者は基本的操作中特に logische Entschliessungen に重點を置き、その内容及び機能に就て詳細なる説明を行つてゐる。併しその述べてゐる所は、さきにあげた „Theorie von den vier entscheidenden Begriffen“ の主旨と本質的に異なるものではないが、多少の補充をなしつゝより組織的な形で示されてゐると云へよう。

「統計的數獲得」に於ては、調査單位の概念が豫め定められ、それに一致する個體のみが數へ上げられ（或は測られ）て始めて、形式的に同種なる單位の總體即ち集團が、而も特定の範圍で把握されうる。調査單位

Erhebung の二種に分つ。後者では logische Entschliessungen が非統計的目的のために作られた材料の選擇の基準を與へる。(a. a. O., S. 31.)

7) 之については後に述べる。  
8) a. a. O., S. 39—106

の規定は實際に把握される集團とその範圍を限定する譯である。<sup>1)</sup> 數へ上げられた個體(單位)は更に豫め定められた調査標識の概念に對應する Merkmalsangaben が徴され、それが該當する群概念の下に一括されて部分集團が形成される。各部分集團には、構成因子として調査單位の概念のみならず調査標識・群の概念に妥當し、又妥當する個體のみが包括される。<sup>2)</sup> 次に把握された集團と部分集團には豫め定められた種類の統計的數が算出され、「統計的數獲得」が完了する。かくの如く豫め定められた調査單位・調査標識・群・表章の概念が實際に把握される集團とその部分集團(とそれらの範圍)と、統計的數の種類を抽象的に決定すると云ふ事情から、一方に於て logische Entschliessungen が Arbeitsvorgänge の基準として、集團及びその部分集團の數量的把握を實現する不可缺的な前提であること——著者はこれを logische Entschliessungen としての「統計的機能」と云ふ——が知られると共に、他方、個々の「統計的數獲得」に於て、具體的な目的に

合致した集團とその部分集團が、特定の範圍に於て把握され得るや否や、それらの數量的説明を求むる形で獲得しうるや否やが、四概念の規定にかゝつてゐることが知られる。個々の「統計的數獲得」に於て調査單位・調査標識・群に特殊の實質的概念を與へることに依つて、實質的に同種の單位の總體(集團又は部分集團)をとらへる事(G. Praxis)に於ては屢々相互に相矛盾する特殊の實質的概念が與へられる。併しそれらの概念規定に應じて、實際に把握される集團及び部分集團の實質と範圍は相異り、統計的數の實質的意味を變化せしめる。表章では特殊の實質的概念が形成されない、更に求める形式に合致した形式的意味<sup>3)</sup>を有する統計的數を表章として規定する事、に依り具體的な目的の達成の基礎が得られる。即ち四概念の規定に基いて一般的な統計的數獲得の方法は具體的な目的に順應し得る。著者は logische Entschliessungen が四概念の規定に依つて、一般的な統計的數獲得の方法を具體的に目的に順應せしむる機能を「特殊の機能」と呼んでゐる。

1) a. a. O., S. 22-25.

2) a. v. O., S. 25-29.

3) a. a. O., S. 38-49.

4) 著者は st. Aussage としての st. Zahlen に absolute Zahlen, Verhältniszahlen, Mittelwerte を挙げ、夫々の有する論理的、形式的性質を述べてゐる。

5) a. a. O., S. 9. 15. „allgemeine, formale Funktion“.



以上述べた所から明かなく、

(1) 著者が *logische Entschliessungen* を特に重視する所以は、それが統計的數獲得の一般的方法をして特殊の具體的な目的に順應せしむる機能を有すること、それ故に個々の「統計的數獲得」にあたつて具體的目的が實現されるや否やはその場合の *logische Entschliessungen* にかゝつてゐるからである。

(2) 統計的數の意味がその基礎に横はる四つの概念の規定に依存すること、そしてそれが變化するにつれて意味も又變化せざるを得ないことに關する著者の主張は本稿の冒頭で指摘した。本書に於ては基本的操作の究明から、統計的數の意味は *logische Entschliessungen* に依つて抽象的に規定され、而してこの抽象的規定は *technische Entschliessungen* で實際に實現する手續が與へられ、*Arbeitsvorgänge* で實際に實現されると云ふ歸結が引き出され、それに依つて、四基本概念と、それを規定する操作及び「統計的數獲得」の過程における他の諸操作との聯關が明かにされてゐる。

大量觀察法に關する一著作

最後に、著者が本書の新しい三つの要點として擧げてゐる點を示せば、次の如くである。<sup>6)</sup>

(1) 方法を目的と區別したこと。

(2) 統計的數成立の過程、換言すれば「統計的數獲得」を若干の基本操作に還元したこと。

(3) *logische Entschliessung* の機能を二つ（一般的並びに特殊的）に分つたこと。

尙本書には以上紹介した要點の外に、(1) 統計的數の性質、(2) *logische Entschliessungen* をなす統計家の任務、(3) *Praxis* と學問（統計方法論及び爾餘の諸學問）との關係、(4) *Engelismathematik* 等の諸事項が論ぜられ、それらに就て多くの問題と示唆を含んでゐるが、こゝでは割愛して後日に譲りたい。

6) a. a. O., S. 92. 7) a. a. O., S. 58-83.  
8) a. a. O., S. 9. „besondere Funktion.“ *logische Entschliessung* が三つの特殊の實質的概念と表章を規定する形式を著者は二つの型に分けてゐる。〔只一回限り、創造的になされる *logische Entschliessung*.〕と多數の基本的代替可能性の下における選擇の形でなされる *logische Entschliessung*. が之である。  
9) a. a. O., S. 9.